



マスター ↑↓to アーティスト



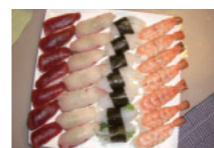
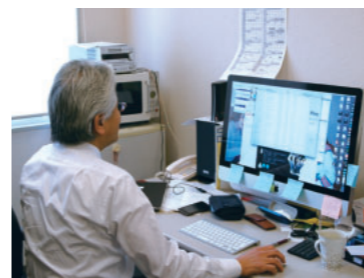
オーケストラの指揮

【第15回】

< グルメであり、
ゲルマンでもあり >

山田 純 音楽文化創造学科
教授
(やまだ じゅん)

- 1949年 東京都生まれ
 - 1972年 東京藝術大学音楽学部楽理科卒業
ジャズ音楽史を油井正一、室内楽を小林道夫に師事
劇団四季オーケストラに、ピオラ奏者として所属
 - 1977年 名古屋市立菊里高校音楽科 教諭
オーケストラの演奏会、リサイタルなどの曲目解説、朝日新聞での音楽批評、雑誌のコラム等の執筆
活動、瀬戸市民オーケストラ演奏会での指揮、小牧市音楽振興事業・名古屋市青年大学の講師と、幅広く活躍。
- 日本音楽学会会員、世界劇場会議理事、日本音楽芸術マネジメント学会監事、日本アートマネジメント学会会員、音楽ペンクラブ会員



手作パン



月刊誌のCD 評執筆



新聞記事の執筆 (朝日新聞)

活動の幅の広さが圧巻である。音楽ビジネスやマネジメント、舞台芸術、ジャズ・ポップスの歴史に精通し執筆や講演活動を行うかとおもえば、教壇に立つまでの若い頃にはピオラ奏者で現在でもオーケストラの指揮を振る。プロデューサー？ プレイヤー？ あるいは批評家？？

「僕はね、料理の専門家なんですよ(笑)。1年365日、子どもの弁当も作ってるんです。今日のお昼はね、自分で焼いたフスマ入りのパンのサンドウィッチ、ほら、こんな具合で……」
もう何年も続けているという作った弁当の記録を見せられる。研究室



のPCのデスクトップには、鏡音リン・レンの画像もある。ますます混乱してしまっていると、執筆中のコラムのページを見せた。「スキゾな音楽」「スキゾってご存じですか……」現在の10代、20代にはあまり馴染みのない言葉かもしれない。1980年代、批評家の浅田彰が著書「逃走論」で用いた「スキゾとパラノ」は、当時、流行語にもなった。スキゾはスキゾフレニー(統合失調症)、パラノはパラノイア(偏執病)の略で、どちらも精神

医学の専門用語だが、あくまでも比喩的に、生真面目にひとつのことにこだわるのが「パラノ」、スキゾは「スキゾイド(分裂病質)」の意味として使われ、パラノとは逆に、こだわらず広く浅くの象徴として使われた。その「スキゾ」だという。

幼少期からピアノ、バイオリンをはじめ、中学の頃にはクラリネットとジャズに傾倒した。そして、東京芸大楽理科へと進む。「ガブリエル・フォーレを知ったことが大きいですね。なぜ、どうして、こんな素晴らしいんだろうと。それです」ところが、ス

キゾな気質が頭をもたげる。「楽理科は、ミュージコロジー、音楽の勉強をするところなんですけど、バイオリンが好きになってしまい熱中しましたね。その後も、クラシックもジャズも邦楽も、弾きたい、勉強もしたい、アートマネジメントも、音楽評論もやりたい。何でもやりたいんです。あれもこれも、何もかも。でも全部完成しない。でも、いいんです。これが私の生き方なんです！」

演奏家であっても画家であっても表現者は、ひとつのことを極めるべく孤独の道を歩む者、そう考えてし

まいがちである。事実そういう言い方もできよう。しかし、同時に、「一芸に秀でる者は多芸に通ず」でもある。ひとつの事柄の、その奥には無限の拡がりがある。演奏家の進む先には、音楽が作られた背景、文化、生活、食べ物、土地の香り…、それらへの知見が求められることはよく知られることだ。そして、「完成しない…」と謙遜するが、ソフトな語り口に包まれながらも研ぎ澄まされた射るような言葉は、その世界の深淵を感じさせる。音楽のこと、舞台のこと、初音ミクからK-POP、中国の剽窃事情と、話題は縦横無尽に駆け巡る。旺盛な食欲は

目を見張るばかり……。
「再来年から、音楽ビジネス・ステージマネジメントコースを、アートマネジメントコースに、変更すべく動いていきます。新しい学問として、学生たちに理想を学んで欲しいんです」音楽、演劇、劇場と日本の芸術をめぐる現状を憂う。「アーティストマネジメントは、芸術家と社会を結びつける仕事。理想がなければ、哲学がなければ駄目ですよ。芸術家を育てる役割もある。損得勘定じゃないんですよ！」いつもの語り口と異なる熱い口調に、才人の本懐を感じた。